

都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話: 0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

山本鼎私論 (4)

An Essay YAMAMOTO Kanae (4)

河 西 万 文
KAWANISHI Kazunori



「児童と図画」「玩具と手工」(大正十一年刊)
「図画と手工の話」(昭和三年)
山本鼎の著作物
山本鼎の著作(刊本)
「油絵・描き方」(大正六年 初版)
「油画のスケッチ」(大正十年)
「美術家の欠伸」(大正十年)

山本鼎が「油画の描き方」(大正六年八月十三日 初版発行)、初版、「大正八年七月十五日 縮版発行」(11.4 cm × 16 cm)に初版(13 cm × 19.2 cm)、ですが印版は同じである。「改版油画の描き方」(昭和四年七月八日 印刷)(13.2 cm × 19.2 cm)、「油画のスケッチ」(大正十年十二月一日 印刷)(13.2 cm × 19 cm)、「美術家の欠伸」(大正十年二月五日 印刷)(13.4 cm × 19.2 cm)、「図画と手工の話」(昭和三年九月二日 印刷)(13 cm × 19 cm)以上アルス発行「児童と図画」(大正十二年六月十五日 印刷)、「玩具手工と図画」(13 cm × 19 cm) 児童保護研究会発行

以上の著作があり、とくに「油画の描き方」はベストセラーで印刷の大きさは同じで縮小版まで発行している。念のため本の大きさを入れたが、ここでは、西洋画について、とくに印象派についてのべているのは、山本鼎が初期ではないかと思う。他に美術書があるが、石井柏亭の著作をみても、参考本からの研究が多いなか、鼎が実際、ルーヴル美術館にいて、感動すると共に近代美術家達にも直接あったとみるべきで、作品も、山本鼎自身が写している。大正元年の手紙(両親への)に記されている。パリでの生活のはじまりであり、山本鼎がこれからのような芸術感をたどったか、版画制作でも理解できる。エッチングは、白黒であるが、ルーヴル美術館のセーヌ河をはさんで、すぐ前の美術学校である「エコール・ド・ボザール」での版画制作のはじまりであり、それから印象派絵画に感動したと思われるのである。一つは創作版画(カラー木版)は実に色彩が美しいことは、印象派と呼ばれる作家が描く風景でもある。「ポールヴァレリイ」

「自由画教育」(大正十一年刊)

大正元年八月二十四日(両親あて手紙)
(山本鼎記念館)
美術週報(大正四年)

この美術週報に書かれている。フランスの芸術に対する意味からも良き資料である。

山本鼎の「油画の描き方」の著作につながる

「女性」大正十二年
「美と子供の眠」ロダンの言葉を引用して「作る」ことの出るのを見るからだ
(実相主義について)のべている

河西万文前稿(3)参照
下さい

山本鼎はドラクロアやクルペーのリアリズムについてのべていないが、しかし彼

(山本鼎より平福百穂に宛てた手紙) 巴里より

山本鼎

これは七月十六日附で巴里の山本鼎氏から平福百穂氏へ宛てた手紙である。百穂氏の承認を得て茲に挙げた。

一昨日おはがき拝見しました。御健健の様子を想像します。勉強しないものは、ずんずん置きざりにされる。まったくです。一體に青年は眞面目になつて居るのです。併し今誰れが製作上に自信の緊張を持つて居るか? 小生には一寸見當りませぬ。感興の純粹、希望に對する抗奮、それ等は多分見かける。けれども製作上に「意志」を有つて居るものは居るか? 小生には一寸見當りませぬ。此の不安、賢人は不安をこまかす事に上手だ。併し必然の結果とし

て憂鬱か、狷介かになる。よく考へて見ると、我れ人共にまだかなり低い處に苦勞して居るんですよ。小生は狷介になりつこない。此憂鬱に抵抗しなければならぬ。小生は同僚から置き去りにされたと考えへ度くない。併し長年の不勉強は、自分の希望から遙かに置き去りにされて居るのは時賈だ。常に小生は努力が足らな過ぎる。アンヌイエが習性となつた、怖い事です。先頃田舎に二た月ばかり暮しました。意地悪くも小生の筆は、土地の特色に冷淡で、自然の特色に戦を挑む。これは勿論悲観す可き事ではないが、為に所謂面白いタブローがもうけられない。奈良まで出向いて、單に木と草とを畫いて居るのは、まぬけな男にはちがひない。併し口説

き落され易い小生には、此の剛情は大事です。二三日前田舎を引揚げて巴里にかへりました。今ブルワードを歩いて来たが、木の葉はいつかが黄色くなり、人は氣持よく知らず知らず日なたを歩いて居る。こう忽ち秋の氣に觸れると、しみじみと旅情を思ひますね。一昨日はカートルジュイエ即ち佛國第一の國祭日であつたが、政府は一般のオーケストラを禁じたから町はただ旗によつて祝されるのみでした。小生はもう三度カートルジュイエにめぐり合ひました。四度はめぐり合ひますまい。戦争もいつ果てる事やら、一周年がやつて来る。そしてまたどちらが、ほんとに勝つか分らない。残念な事には、小生は伊太利を見る事が出来

ないでせう。今巴里には三つばかりの展覽會があります。どれも恤兵的のもので、そして一法の切符を買ふと、後日抽籤があつてロダンのプロンズ、マチスのデッサン、マネー、マネーの油繪なんかがとれやうと云ふ譯です。左様、マネー、マネーロダンなどの作物は、一寸時價いづれも一萬法以上のものであります。たれに當るか、皆切符を買つたようです。森田(恒友氏)は一昨日ブルターニヨへ立ちました。森田は秋までにかへるさうです。森田より約六ヶ月ばかり遅れて、小生も兄等のふところにかへります。ますます御健勝ならん事を祈る。

の美術評論がある「筑摩書房」の発刊(昭和十七年)「芸術論集一」七〇〇〇部発刊、同昭和十八年(五〇〇〇部発刊)「芸術論集」(二巻)「復興期の精神」花田清輝著 眞善美社刊 昭和二十年刊)この三冊の書が山本鼎の芸術論を理解できるものとして推薦したのである。山本鼎がフランスでの影響は、計りしれないものがあったが、日本に帰国して芸術家として大成した多くの人々と、同様であつたが、彼は他の芸術家と異なる点は、その発想力の大きさにあると思つ口シやにまわり、自由な表現をみいだしといつても、今の日本の美術教育からは、理解できないかも知れないが、写生からくる自由性である。当然のごとき教科書による図画教育について、山本鼎は日本に帰つて思つたに違いない。実写生の教育は、当時若い教師の中には、少しづつであるが外での写生が行われていた。その土台があつて山本鼎が提言した自由画教育の運動が行われて全国的になつていったことは事実である。山本鼎が、バリーで学んだ、そして身辺に接してきた画家達が、印象派時代の人々でもあつた。それは、木版画に表現されている。今日山本鼎の木版画を拝見しても実に彼がいつ実相主義が伝わつてくるのは、

はリアリズムについて自然を写すことでありロタン・セザンヌ・ダヴィンチの実相主義である。

「油画の描き方」は
図版(三色刷)
モスクワ(1916)
夏の山
(ハインドスケッチ)
H夫人(F30号)
静物(F12号)

彼の新鮮な感覚があつて今日迄もその生の表現が版画にみられるといつて良いであろう。ゴッホ達が日本の浮世絵に感化されたのも新鮮な色彩にあつた。



モスクワ(1916)



H夫人(F30号)



静物(F12号)

フランスから帰国してすぐ発表した「油絵の描き方」はベストセラーになった。「油画のスケッチ」も、自作のカラー図版二十図を掲載している。

同様ベストセラーになって山本鼎の生活をささえてくれた。

山本鼎が自序に「セザンヌは、母親の葬式にゆくひまさへも惜むで、あとで深く悔ひたさうだ。しかし、画家にとつては、一日として画をかかずに居られないといふのが一番幸福な状態なんだ。だから此集の如きは、結構な記念と云ひ難い、それ故みづから嘲つて「美術家の欠伸」と名づけたが、実に私の生の眞実な「*so*」なのである……」と、この書に山本鼎の重要な論文が入っている。「自由画教育の要点」(P109)、西洋画のみかた、(P166)、帰路の美術上の所見(P214)、哥路(P298)、農民美術と私(P131)といったように、研究者には、一見の必要がある。オーベルに旅行してゴッホの墓を見たことを書いているが、筆者もフランスにいった時友人につれられて見にいった。(山本鼎が当時接した風景と対話をして、感動したことから、フランスにおいて一作目にオーベルの畑を銅版にして(一版多色刷り)刷ったつい昨今のことである。)

山本鼎が「自由画」という言葉を選んだのは、不自由画の存在に对照しての事である。云うまでもなく不自由画とは、模写を成績とする画のことであつて、臨本 扮本 師伝等によつて個性的表現が塞がれてしまふ其不自由さを救はうとして

(1)大正二年 文
(二)九一三
(2)平成九年十月のこと。阿部彰、(版画家)今村由男(版画家)と二人のこと

自由画とは

「油絵の描き方」大正十五年版 カラー
H夫人の肖像 (F25)
浅間山 (F20)
桜山 (F12)
雪景

(3) 油画のスケッチ
西洋画の変遷 (P15)
(4) 油画のスケッチ
(大正十年十一月)

山本鼎は現代絵画について 古典派 学院派 初期印象派 後期印象派 分裂派 未来派 立体派 日本画家に分類している。

一八八二年十月十四日生 山本鼎
一九二二年十月十九日(鼎)(長野県)ミウラセゴロウ(外務省)エゴルドボザール()
国立美術学校アルペマール銅版画教室ワルトホル教授について
一九二二年一〇月二

案ぜられたものである。「美術家の欠伸」(P111)にのべている。

山本鼎がフランスにて学んだことをのべたいのであるが、彼の表現の意味するものは何か、創造という言葉について表現しようとしたが当時としては、まさに「自由画」という言葉が適当であった。後期昭和以降になり創造教育という言葉が多くみられるようになるが、ともかく、彼がフランス絵画について初期印象派(クロードモネ)、後期印象派(セザンヌ・ゴッホ)、新印象派(マチス) 立体派(ピカソ)、未来派(カンディンスキー)を挙げている「美術家の欠伸」(P172)「油画のスケッチ」(大正十年十一月一日 発行)には初期印象派としてマネ・ピッサロ・モネ・ルノワール 後期印象派セザンヌ・ゴッホ・ゴーギャン 新印象派マチス・ルドン・ツニイ 分裂派ルソー、立体派・ピカソ この作家達が山本鼎の芸術感をかえたのであるが、「現代の絵画は、一括して断ずれば、とにかくそれは「実相主義」の美術であります。直接に眼に観たもの、心に感じたもの或は身づから空想したものを、合理的な構図で現はさうとして居るのであります。」とのべているが、反面カンディンスキーのような作例を「彼れ等の美術は、要するにたいへん面白い「図案」です。言葉のない「詩」であり譜のない「音楽」です。」(P156)と理解をしめそうとしている。

これに対して、古典派と学院派を入れているが、「ルーヴル美術館」エドワール・マネーの「オリンピア」を挙げているし、初期印象派以降の絵画を実相主義といっているのも興味深いのである。クロードモネー、ピサロ、ルノワールと挙げている。

セザンヌとゴッホが当時の画家に影響を与えたものであることをのべている。とくに、「モネの絵画は派手な毛糸の屑を糊で固めたやうに見えますが、セザンヌのそれはどれも金石の面に見るやうな幽微な輝きを有たものです。例へば黄色は瑪瑙のやうであり、緑色は翡翠のやうであり、赤は又珊瑚か紅寶石のやうに艶やかで底深いのであります。彼はそれ等の比類ない色の力を多分林檎や陶器の物質美から鍛錬したであります。彼は実に好んで林檎を写生しました。其写生たるや、私は見ましたが、追求の筆が重ね重ねられて林檎の周囲に深さ一分もありそうな溝が生じた程に絵の具が盛上っているのです。それは明るい面は珊瑚のやうで蔭の部分は紅寶石のやうな二つの眞赤な林檎でした。」(P166)とセザンヌとゴッホについては、当時の画学生が目標にしていたことが書かれている。日本人画家を認めていて、「山本鼎が本人の紹介文を書いている。「私は森田恒友氏等と同年に美術学校を出た者で、同年親友等の中して居る美術院洋画部へ投じたのであります。私は比本でも解りのやうに、実相主義を画家の有つべき 否人間がもつべき重要な思想として奉ずる者であります。今日まで直写的形式に於てこれを画の上に表現して来たのであります。」とのべている。

山本鼎が、自己の方向性を明確にいついて興味深いのである。ではロシアで見て来た民芸品について、広めようとし

十二百(ハリーにて)
 (5) 油画のスケッチ
 P. 103

日本農民美術研究所
 (大正八年設立)

農閑期を利用しての
 副業的工芸の研究を
 旨とし、時々作品の
 展覧会を開催す。

所長 山本 鼎
 理事 金井 正
 倉田白羊
 山越脩蔵
 南 弘

(手工芸には今でい
 う民芸品のこと)

「油画の描き方」(昭
 和四年増補新版) P
 203)

「油画の描き方」改
 訂増補新版(昭和四
 年七月十一日刊)
 カラー図版 四枚
 エチュード (F 15)
 落葉松山 (P 8)
 三角山 (SM)
 林間の永室 (SM)
 () 内は油画の大
 きな号数

たのか、それは信州の寒い冬とロシアは似ていて、農閑期で行える名産品について考案し商品化する意図があったのでは
 ないかと思う。旅行者がロシアの片田舎での民芸品を安く入手している状況を山本鼎も旅行者として感じとっていたと思
 われるのである。

信州の冬は寒いので当然冬期については、何か工夫する必要があり、農民美術運動を行った。勿論金井正等の協力者、
 弟子の中村実(現代二代)等に伝承されている。「日本農民美術研究所」復興が必要で、上田の地にて、山本鼎記念館とつ
 なりながらあればなお良いと思う。山本鼎記念館には、鼎の全容資料が整理されていて、研究及び研究者にとれば研究が容
 易に出来るが農民美術研究所についても、完全に資料がある。今でいう民芸品が製作されていて、山本鼎が残したものと
 して、ロシアの風土と似ている、農閑期に利用した製作運用をした。(金井正・山越脩蔵・倉田白羊等)の協力があったこ
 そであるが、「農民美術とは、農民の手によって作られた美術的手芸品の事であって、民俗的若くは地方的な意匠 素朴な
 細工 作品の堅牢等が其の特色」とされて居るのであります。日本にも農民美術と称する可きものが昔から各地にあるに
 はありましたが、其の制作及び販売の方針が頗る消極的で、何等の芸術的理想も産業的感動もなかったために、段々製作
 品の美的価値が低下して、「美術家の欠伸」(P144)と山本鼎はのべている。

農民の農民による手工品の制作があつて、商工業の一つとして捉えているところに、山本鼎の発想があり、成功したが、
 現代復興すべきと思う。研究所を通して農民運動の大切な生活の発祥をみいだした事は、山本鼎の信念の確かさである。



エチュード (F 15)

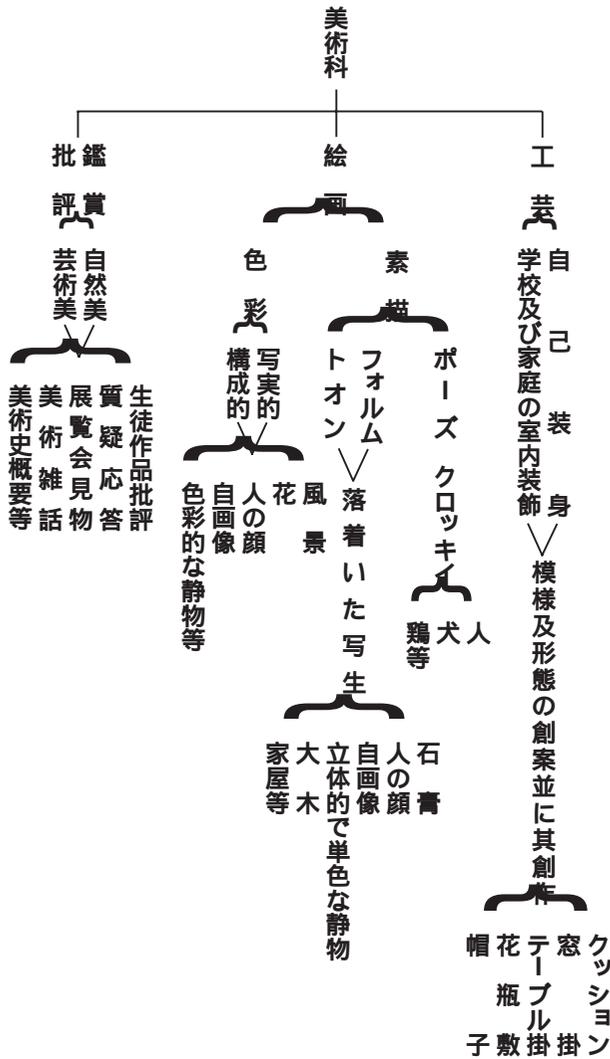


林間の永室 (SM)

(6)「児童と図画」
 (大正十二年 児童
 保護研究会発行)
 (P.11)
 「児童と図画」(大正
 十一年刊) P.84~85

リアリズム(実相主義)を「自由画」今でいう児童創造画ともいうべきか、不自由に対する自由性「愛を以て生徒の創造を処理する教育である」。「児童と図画」に「君の自由画の主張は、要するに臨本を廃 たったそれだけの事なんじゃないか」といわれたがそうだ、それだけで申しているのみである。と答えて主張しているが、自由画という言葉が、不自由に対する臨画は、下手な画家の見本から真似をするからだめだといったことである。」といっているのである。

私の学校(自由学園
 教授画家山本鼎の美
 術科の授業)



「油畫の描き方」續言
 第一章 油畫の起原
 第二章 画を始める心得
 第三章 素描
 第四章 線画と模写
 第五章 色
 第六章 油 画 具
 第七章 油
 第八章 用具及びキヤンパス
 第九章 材料使用上の注意
 第十章 古今の手法
 第十一章 静 物
 第十二章 風景
 第十三章 人物静物
 第十四章 構 図
 挿絵の説明
 カラー(三色刷)
 モスクワ
 夏の山
 H夫人
 静 物
 参 考 山 本 鼎 作
 「絵画」(一九三七刊)
 パリアシエツト畫房出版
 シャール・モローウ
 オチエー
 「ラ・パンチエール」
 原題日本語
 大森啓助訳
 「春島会」(昭和四十七年刊)

「油畫の描き方」(大正六年八月十三日発行)の名著である。第一章 油畫の起原について洋書から勉強したと思われるが、当時洋書ではみあたらなかったたので学校でか、又は独自の、山本鼎が秀れた顔料・材料の勉強をしている。リベラルなものでなかったところから、山本鼎が現代絵画の把み方から、「20世紀を動かした人々」昭和廿九年講談社刊、「私の西
 欧美術ガイド」宗左近著(昭和五十六年刊)の二冊の本を読むと山本鼎の先見性といったものが理解できる。

第二章 素描の項では、セザンヌとレオナルド・ダヴィンチの例を挙げている。

第三章 油絵具

フレイクホワイトをあげている。カドミウム、ウルトラマリンと交ぜると墨ずむことをのべている。

シルバーホワイト、ジュンクホワイトをあげてファンデーションホワイト。

赤は、マダーレイキ、ローズマダー、カーマイン、クリムソンレーキ、ヴァミリオン、カドミウムヴァミリオン、マ
 ースレッド、ベネチアンレッド、レッドオークル、マースレッド、

茶色系は、ヴァンダイクブラウン、バントシエンナー、プチメン、バントシエンナー、シエヌブルユレー、マースブラウ
 ン、ペロナブラウン、マースオレンジ、ローシエナ、ブランオークル、ローアンバー、バントアンバー。

緑系はエメラルドグリーン、エールエロネーズ、ソトロシャンエロー、コバルト、クロームグリーン(ブルシャンブル
 ーと混色はだめとある)コバルトグリーン、ヴリジャン、テラベルト、ベルディグリス、カドミウムグリーン。

青色はウルトラマリン、フレンチウルトラマリン、コバルトフリュウ、ブルースコバルト、ブルシャンブルー、インチ
 ゴーブルー、

黒色はアイポリブラックのみあげている。

カドミウムイエロー、ミドル、ペイル、カドミウムクレール、カドミウムオレンジ(オランジュのこと)、イエロ
 オカー、ストロンシャンイエロー、オーレオリン、ジョンヌストロシャン、ネーブルスイエロー、ジョンヌスナーブル、ク
 ロームイエロー、イエロオカー、レモンイエロー、ジョンヌストロン、クロームイエロー、クロームクレール等も挙げてい
 る

第七章 油

テレピン、ナットオイル(くるみの油)、リンシード、ポーピーオイルを、

第十章 古今の手法

この項目は山本鼎の勉強して来た的確な意見がのべられている。

参考

「油絵の科学」

山下新太郎著（昭和二十三年）好学院発行

「油画の描き方」（大正十五年版）



山本 鼎 雪の日
リトグラフ(ジंक版)(4.3×16cm)
「洋画のてほどき」倉田白羊著
三業社 明治44年9月 p62より

黒田清、岡田三郎助は、初期外光派の手法を日本に伝えた人だ、黒田氏の師はラファエルコランである。中村不折はジャンポールローラン（フランス画家）点描法を学んで来た人は、児島虎二郎、ルノアールの感化は梅原竜三郎、セザンヌには安井曾太郎、森田恒友、マチスの影響とモネの感化は正宗徳三郎に見えるところのべている。
その外にドラクロアなどをあげている。

静物についてはセザンヌのみあげて説明している。風景、クロド・モネー人物、動物については、芸用解剖学の本を読めとのべている。森林太郎と中村不折のものを参考にしようとする自画像を進めている。レンブラントは18才頃より60才まで自画像を描いたことをのべている。「モナリザ」を第一にレオナルドのこと、ドラクロアの馬の画についての説明、構図についてラファエルの楕円形構図法、三角構図法、及びセザンヌをあげている。



H婦人



雪景

「油画のスケッチ」

第一章 油画スケッチに就ての心得

第二章 西洋画の変遷

第三章 美と美術

附録 ソー又河

(セー又河)

カラー版二十枚挿入

している

「油画のスケッチ」(大正十年十二月一日発行)

「私のスケッチに就て 私は自分のスケッチの複製を澤山巻頭に掲げましたが、無論それを手本にせよといふ意味ではなくつまり此本を賑かにしたまでの事で、玄關の装飾なのであります。ですから、諸君に興味を有つて見てはもらひ度いが眞似されるのは困ります。「二木除枚」(原文ママ)のスケッチのうち三枚を除いた他は千九百十三年から千九百十六年に亘つて私が仏蘭西のバリー、リヨン、伊太利亜のフロレンス、それからノルウエー、スエーデン、ロシア等旅行した時の記念であつて、いづれも処々で立ちながらハイドスケッチに写生したものであり、どれも一時間から三時間位費やして出来たものであります。」(P. 35)

- 一、自画像
- 二、リュクサンヴェール公園
- 三、巴里近郊の夕暮
- 四、巴里のプラス
- 五、クアルチユエー、グルネルの娘
- 六、ソー又河畔
- 七、サンシールの秋
- 八、ソー又河畔の街
- 九、ソー又の朝
- 一〇、ロー又河畔の冬
- 一一、里昂郊外
- 一二、里昂郊外
- 一三、ソー又河の洗濯船
- 一四、里昂郊外
- 一五、ベルゲン港
- 一六、ダチャの夏
- 一七、ダアチャの秋
- 一八、奈良
- 一九、奈良の街
- 二〇、奈良の秋(三色刷り)をのせている。

山本鼎の「油絵の描き方」「油絵のスケッチ」の概要をみたのであるがヨーロッパの画家「油画のスケッチ」にレオナルド・ダ・ヴィンチ、ジョト、ミケルアンジェロ、ラファエロ、ボチチェリ、レンブランド、ドラクロワ、アングル、ゴッホ、グレコ、コロ、ミレー、ドオミエ、クールベエー、シャヴァンヌ、マネー、モネ、ピサロ、セザンヌ、ゴッホ、ゴッパン、ロダン、ルノワール、マチスの作家をあげている。とくにセザンヌ以降は、山本鼎と同時代である。

山本鼎の外国での影響については、「芸術家の欠伸」(大正十年二月十五日発行)前に書いたのはぶくが、「プルトアーニユの日記」(一九一三 七・八月)小杉未醒との旅行が参考になる。

「プルトアーニユの日記」(山本鼎記念館)